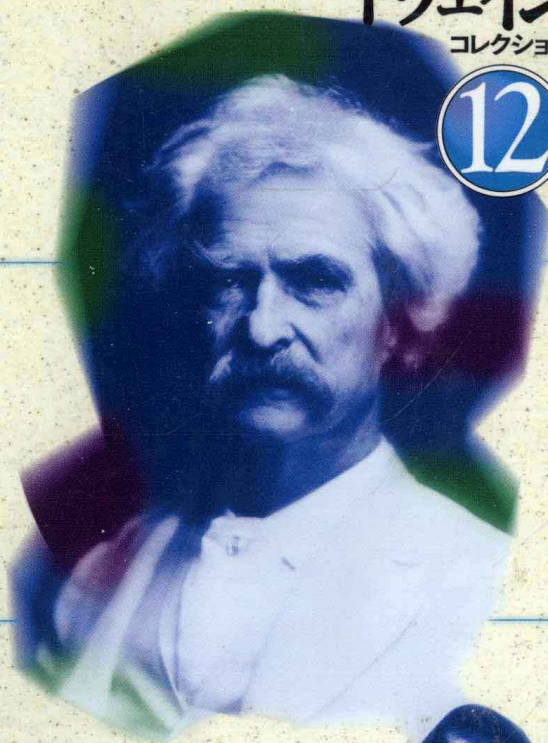


アメリカの爵位権主張者

訳★三瓶眞弘

マーク
トウェイン
コレクション

12



Mark Twain Collection 12

The American Claimant

マーク・トウェイン
コレクション

12

The American Claimant

アメリカの爵位権主張者

訳★三瓶眞弘

江苏工业学院图书馆
藏书章



彩流社

《訳者略歴》

三瓶 眞弘 (さんべい もとひろ)

カリフォルニア州立大学を経て、法政大学大学院博士課程修了。

東京情報大学講師。

アメリカの^{しゃくいけんしゅちようしゃ}爵位権主張者——マーク・トウェイン コレクション⑫

1999年1月25日 発行

定価は、カバーに
表示してあります

著 者 マーク・トウェイン

訳 者 三 瓶 眞 弘

木 内 徹

発行者 竹 内 淳 夫

発行所 株式会社 彩 流 社

〒102-0071 東京都千代田区富士見2-2-2

電話03(3234)5931 FAX 03(3234)5932

組版 (有)ポイントナイン

印刷 (株)平河工業社

製本 (有)青木製本

Printed in Japan

落丁本・乱丁本はお取替いたします

ISBN 4-88202-533-7 C0397

釈明

ここで再登場してくるマルベリー・セラーズ大佐とは、何年か前に『金メッキ時代』というタイトルの、初版の物語の中で現れたエッシヨル・セラーズのことであり、同じ物語の後続の版のベライア・セラーズでもあり、その後、ジョン・T・レイモンドの手によって上演公開された劇に出てきたマルベリー・セラーズとも同一の人物である。

名前がエッシヨルからベライアに変えられたのは、どことも知れぬ深淵から反旗を翻して現れ、誹毀訴訟を起こすと脅かして、名前の変更を求めたエッシヨル・セラーズなる人物の請願をのんだからであった。彼の要求が認められた結果、エッシヨルが自作に登場することはなくなった。劇中人物であるベライアという名前も、同族の別の御仁の不満を解決するために断念しなければならなかった。名前に異議を唱える人も、もう観念して問題にせずに済ましてくれるだろうという希望のもとに、マルベリーなる代用の名前が産みだされたのである。今のところ、ゴタゴタもなく、その名前で通っている。出訴期限法の擁護を受けて、今回はまあまあ無事にいきそうなので、本著では再びその名前でいこうと思う。

一八九一年、ハートフォードにて

マーク・トウェイン

本書における天気事象

本書には、天気事象に関する描写は全くない。そういったものに触れずして、一冊の本を著わしたいという試みなのである。フィクションでこのようなことをするのは、初めての試みなので、失敗に帰するかもしれないが、向こう見ずの人物ならやってみるだけの価値はあるように思えたので、筆者は乗り気になった。

物語を通読したいと望んでいる多くの読者諸兄が、なかなかそれをできかねているのは、天気事象の説明に足を引っ張られるからである。二、三ページごとに天気のことでもやきもきして、ペンを中断させねばならないことほど、作家の進捗状況を阻むものはない。こうした描写がしつこいほど介入してくるのは、読者にとっても著者にとってもよくないことは自明の理である。

もちろん、人間の経験を著わした作品にとって、天気は大切なものである。それは認められる。しかし、そういったものは、物語の流れを中断させない、邪魔にならないところで説明されるべきなのである。そしてそれはまた、天気のことには不案内な稚拙で素人くさい描写ではなく、語られるにふさわしい、最も効果的な表現であってしかるべきである。天気事象は文学上の特性である。不馴れな者の手にかかつては、いいものが書けるはずもない。当の著者自身も、取りあげるまでもないごくありきたりの天気事象ぐらひは扱えるが、それとて巧みなものを書けるわけではない。そんなわけで、この本の必要に応じた天気事象を、素養のある評価の高い熟練した文筆家から——もちろん、彼等の名前を付した上で

のことだが——借用してくるのが最も賢明であることのように思えた。こうした引用は、この本の後部の目障りにならないところに置いてある。読者諸兄におかれては、本書を読み進めていく過程で、折々に、「補遺」をめぐって、随意にそれを参照していただきたい。

目次／アメリカの爵位権主張者

第一章

ロズモア伯爵対アメリカの爵位権主張者——バークレー子爵、主張者に爵位を譲ることを提案する——主張者からの手紙——バークレー子爵、渡米の決心をする

15

第二章

マルベリー・セラーズ大佐と彼の画廊——ワシントン・ホーキンスの訪問を受ける大佐——回顧談義——ワシントンは大佐に、チェロキー・ストリップの連邦下院代議員になったことを知らせる

25

第三章

セラーズ夫人は、大佐を評して、「相も変わらぬの策士家で、親切で思いやりがあり、成功ばかり夢みてる空想家で、無責任で失敗ばかり繰り返している人」と言う——ダニエルとジニーを引き取った際の話——大佐、「クローパー畑の豚」なるゲームを編み出す——サッグスをなだめるため、至宝としている美術作品との交換を申し出る大佐——銀行強盗の片腕のピート

35

第四章

ある北部の男が「クローパー畑の豚」の販売を請け負う——親戚の死亡により、セラーズが正当のロズモア伯爵になり、その結果アメリカの爵位権主張者とな

51

第五章

る——ゲンドレンの学校に呼び出しの迎えがいく——故人となった前主張者と弟の亡骸がイギリスに船荷として送りだされる——ホーキンズと太佐は「ロズモア・タワーズ」に忌中紋章を打ちつける

59

グエンドレンの手紙——彼女の帰省——ホーキンズは紹介されて、大満足——銀行強盗からの連絡——ホーキンズとセラーズは、報奨金をもらうまで、あと十日待たねばならない——バークレー子爵と爵位権主張者の遺体が同時期にイギリスとアメリカを出発する

第六章

今は亡き爵位権主張者と弟の遺体がイギリスに着く——爵位権の不法行使者が喪主として式を執行、遺体は親類縁者と共に、コルモンダリー教会に埋葬される——有能な衣裳デザイナー、サリー・セラーズ——銀行強盗から、またも接触あり——彼の居場所をニュー・ギャッツビーにつきとめる——大佐がエレベーター内で片腕のピートを目撃——同じホテルにバークレー子爵到着

69

第七章

バークレー子爵、羽根ペンを使って、現在までの「印象」を走り書きする——火事があり、ニュー・ギャッツビー（ホテル）倒壊——うろたえたバークレー

75

第八章

は、日録の「印象記」のみをもって逃げる——片腕のピートが捨てた服を見つけて急いでそれを着るパークレー——朝刊に、ロズモア家の後継者の英雄的な死が、デカデカと感動的な調子で報道される——パークレーは新しい名前を名乗り、変名で出発する

81

第九章

パークレーと片腕のピートの二人ともを亡くした大佐の悲嘆——霊の肉体化——家族に火災死亡のニュースを知らせる——大佐は亡骸を確認し、遺族となった父親の元に遺骨を送ろうとする

89

第十章

おさだまりの女優とホテルの火災に合った彼女のダイヤモンド——大佐は三かご分の遺骨を拾ってくる——セラーズ夫人、遺骨の「正装安置」を拒否する——気前のいい忌中紋章——遺骨は伯爵が依頼してきたら送ることになる

100

パークレー子爵は、拝借してきた衣服にあった五百ドルを預金する——『職工討論クラブ』に出席——パークレー（名を変えてトレシー）は、この国に来たことを喜ぶ

第十一章

仕事がないトレーシー——簡易下宿屋にありつける——屋根の上で寝る——
「私の娘のハッティ」——トレーシーは、ハッティ（別称ブス）から更に濃密な
「印象」を受ける——バロー氏現われる——そして、トレーシーの仕事探しの協
力を申し出る

111

第十二章

下宿屋の夕食——「金のない」ブラディさんには「夕食もなし」——「どうい
うわけでその帽子をかぶるようになったんだい？」——片腕のピート（と思わ
れる人物）をちらっと見る——トレーシーの日記帳からの抜粋

126

第十三章

トレーシーと職能別組合——下宿人仲間に嫌われる——それが、アレンを懲ら
しめたことで人気者となる——電報

137

第十四章

再び「職工達の討論クラブ」——トレーシーはバローの意見に慰められる——
「馬鹿であろうとなかろうと、あいつはそれに飛びつくさ」——「爵位だと！
ああ、そうとも、申し出られたものなら受け取るんだな」

149

第十五章

「あなたは下宿代が滞っています」——「盗まれてしまった」——（い）なくなってしまったもののリストには、アレン氏も——「有り難う」の電報きたる——トレーシーの落胆——「お前は気晴らしをしなくっちゃ」

159

第十六章

共同制作の所蔵芸術品——絵描き達——「大砲が我々のトレードマークなんだ」——トレーシーの心、慰められる

169

第十七章

後続の電報はなし——「あのぞっとするような絵描きたちに共謀者が要るなら、僕がなつてやる」——トレーシー、仲間に入れてもらえる——霊を肉体化する実験のあてがはずれる——航海用に調整されたレコードプレーヤー——メタンのガスの利用

179

第十八章

ロシアを自由にする大佐の計画——「私はシベリアを買うつもりだ」——肉体化した霊の出現——トレーシーは大佐の美術収集品修復に請われる——ただちに彼はそれにとりかかる

191

第十九章

莊嚴にして当惑させられる靈の肉体化——靈体がリングを二個も食べる——お
びえるホーキンスとセラーズの二人——「きつと何かの間違いだ」

201

第二十章

トレシー、爵位権主張者の正気を疑う——爵位権主張者、トレシーに尋問
——サリー・セラーズ、トレシーに会う——猛烈な一目惚れ——おめかし屋

211

第二十一章

身の入らない絵、身の入らない帽子製造——トレシーの仕事は満足してもら
える——セラーズが所有するパークレー卿の新しい絵——「彼は気持がグラグ
ラする人だ」——氣まずい晩餐会——「彼等はお互いの首に抱きついた」

220

第二十二章

「幽霊を肉体化させることは現状のまま止めないと」——サリー・セラーズ、
「レディ・グェンドレン」の呼称を拒否する——今は亡きパークレー卿、サリー
の英雄——「疑惑」という名のいかがわしい悪魔が彼女をナイフで刺した」

236

第二十三章

トレシー、父に手紙を書く——サリー・セラーズ嬢との結婚を期に両家は結

247

束できるはずだ——伯爵は「アメリカに渡り、仲介の労をとる」決心をする——おさだまりの「真実の愛の行方」、その他——「あなたが伯爵の息子ですって！ それなら証拠を見せて頂戴」

第二十四章

関係者全員にとって時間がノロノロと過ぎていく——「クローバー畑の豚」の成功——セラーズは禁酒運動の講演にかかりつきりになる——大佐とセラーズ夫人、ヨーロッパに出发——ホーキンズとサリーの話し合い——詐欺師のトレーシー

260

第二十五章

電報——「彼女は幽霊と結婚しようとしている」——トレーシーとサリーの談話——爵位権侵害者の到着——「引き取ってくれるなら彼を渡そう」——ロスモア・タワーズでの静かな結婚式——セラーズは、イギリス行きの一行に加わらない——注文次第の天気を提供する準備

274

補遺 本書で使用する天候（著名な書からの引用）

287

アイデンティティを求めて苦闘する作品
訳者あとがき

ピーター・メッスン

291

317

アメリカの爵位権主張者

本文中の「」は訳者註である。